

カラリパヤット *Kalarippayattu* の諸相

—南インド，ケーララ州における マーシャルアーツの実証的研究—

高橋 京子*

南インド，ケーララ州に伝承されるマーシャルアーツのカラリパヤットは，一説にはホリスティック武術と言われるが，その根拠は明確にされているとは言いがたい。本稿ではフィールドワーク，筆者のトレーニング体験，グラフノーテーションという方法を主として用い，身体トレーニング，医学，信仰という多角的な視点から，カラリパヤットがホリスティックなマーシャルアーツである根拠を明らかにすることを目的とする。その結果以下のことが考察された。カラリパヤットは，第一に①全身運動，②自己防衛，③攻撃，を目的とする身体トレーニングである。第二にアーユルヴェーダを基盤に①疾病予防のための健康なからだ作り，②治療，③独自の信仰に根ざして人間を全体的に扱う医学，である。第三に背景には，ケーララ社会における厳格な慣習を反映しながらも，宗教，カーストや男女の枠を超えた特異な信仰が見られる。そして結果としてカラリパヤットは身体トレーニング，医学，信仰の3つの要素を満たしつつ，それらを包含して，人間が人間らしく生きるために不可欠な，肉体と精神のバランスを重んじたホリスティックなマーシャルアーツなのである。

キーワード：カラリパヤット，マーシャルアーツ，身体トレーニング，グラフノーテーション，医学，信仰，ホリスティック性

目次	3・3 ウリチル uzichil
はじめに	4. 信仰としてのカラリパヤット
1. カラリパヤット Kalarippayattu	4・1 カラリの内部構造
1・1 カラリパヤットの概要	4・2 カラリでの慣習
1・2 カラリパヤットの歴史	5. カラリパヤットのホリスティック性
1・3 今日におけるカラリパヤット	おわりに
2. 身体トレーニングとしてのカラリパヤット	
2・1 トレーニング	はじめに
2・2 グラフノーテーションによる動作分析	
3. 医学としてのカラリパヤット	
3・1 予防医学	
3・2 治療医学	

はじめに

近代スポーツは西洋から世界に発信された。稲垣（1993）によれば，スポーツが中心化，産業化される過程で，未組織のスポーツや民族固有の土着のスポーツは周縁化された。その結果

*立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

近代スポーツは、身体を酷使させても勝つための競技として定着している。しかしこのような近代スポーツは、肉体と精神を切り離れた末にドーピング問題などを引き起こし、臨界点に達していると稲垣(2001)は述べる。稲垣(1993)は、グローバルな視点や考え方が要請される現代こそ、周縁に追いやられた、身心一如の精神に基づく東洋産の武道のようなスポーツを見直すべきだという。そしてこれからは、こうしたスポーツと近代スポーツとの共生が必要だと訴えている。

河野(1992, 1994)は、稲垣が東洋産の武道として挙げる南インドのカラリパヤット Kalarippayattu を研究している。河野は、伝承地にある C. V. N. カラリで受けた自身の治療体験と参与観察から、地域生活と養生、心身教育が一体となったカラリパヤットを「ホリスティック武術」(河野1992: 766, 1994: 198)であると紹介している。身体、環境などを含めて患者を全体的に扱うホリスティック医学を手がかりとしたこの表現は、カラリパヤットの身心一如の精神を的確に示しているが、根拠が不十分であると思われる。

そこで本稿は、南インド、ケーララ州に伝承されるカラリパヤットを対象に、筆者の体験とグラフノーテーションという方法論を用い、身体トレーニング、医学、信仰という多角的な視点から、カラリパヤットがホリスティック¹⁾なマーシャルアーツである根拠を明らかにすることを目的とする。

本稿の研究期間は、1期:2004年2月4日～3月25日、2期:2005年2月2日～3月5日、3期:2005年7月27日～9月10日、4期:2005年12月26日～2006年2月13日とする。研究方法は、現地で文化人類学的手法に基づきおこな

た映像取得やインタビューなどのフィールドワーク、トレーニング体験を含む参与観察、文献調査、動作分析とする。筆者はこの期間中、ケーララ州北部カンヌール Kannur 県タラッシャーリ Thalassery 市²⁾ カディールール Kadirur³⁾ にある、ナヌグルカル⁴⁾ Nanu Gurukul 率いるグルクラムカラリサンガム Gurukulam Kalari Sangham (以下、G. K. K. S.) にて、合計9週間のトレーニングを体験した。3期には州都ティルヴァナンタプラム Thiruvananthapuram にあり、海外公演や外国人受け入れの多い C. V. N. カラリでフィールドワークと参与観察を実施した。そしてトレーニングの動作分析には、舞踊動作分析に用いられるグラフノーテーションを用いる。

次に先行研究を検証する。日本国内においてカラリパヤットを対象とした研究は、まず先述のアジア舞踊研究者の河野(1992, 1994)の研究が挙げられる。「ホリスティック武術」という指摘は重要だが、そこに至るまでの分析過程が明示されていないため、本稿ではホリスティック武術である根拠を明らかとする。また河野(1988, 1990)は、同州の舞踊劇カタカリ Kathakali でカラリパヤットのマッサージを用いてからだや顔を整形することから、それとカラリパヤットとの共通点を指摘している。次に舞踊研究者の石井(1995)は C. V. N. カラリでのインタビュー、観察から、カタカリ演者のトレーニングも実際の動きもカラリパヤットに由来すると考察し、芸能の成立と武術には密接な関係があると述べている。石井は、カラリパヤットでおこなわれる8つの動物の動きは暗黒舞踏を思わせる舞踊的な動作で、人間が本来持っていた野生を取り込んだとも推察している。また石井(1999)は、ケーララ州がサーカスにゆかりの

地である理由を、超絶技巧を見るような動作の
カラリパヤットが発達したような州だからである
と推察している。次に舞踊人類学者の宮尾
(1987)も、河野、石井と同様にカタカリの基礎
訓練としてのカラリパヤットを紹介している。
スポーツ史研究者の稲垣(2001, 2004)は、カ
ラリパヤットを経験した男子が次のステップと
して武術、女子が舞踊に進む点を挙げて、カラ
リパヤットを「総合身体修練法」(稲垣2001:
57)であると考察している。スポーツ人類学者
の松浪(1989)は、動作の点でカラリパヤット
がエスキモー人の格闘技と似ていると指摘して
いる。またヒンドゥー教の多様性の上にカラリ
パヤットが成立したと考え、ヒンドゥー教の重
要性も指摘している。以上の研究は、カラリパ
ヤットとカタカリの関係のように周縁部分から
対象を俯瞰するにとどまり、対象そのものの分
析には及んでいないといえる。河野の「ホリス
ティック武術」という捉え方は本稿の主軸とな
るが、トレーニング体験を基盤に実証的に対象
に迫るという視点、身体動作に特化する視点が
不足していると思われる。そこで本稿では体験
とともに動作分析から、対象がホリスティック
性をもつと捉えられる根拠を明らかにする。次
に、カラリパヤットを研究した新美(2001)は
C. V. N. カラリでのトレーニング体験を通し
て、カラリパヤットが伝統武術か否かを考えて
いる。新美は、実践性、競技性を目的とするケ
ーララ・カラリパヤット・アソシエーションの
近代スポーツ的な指導方針に対し、自己の身体
との対話を目的とするC. V. N. カラリの指導方
針は伝統武術と認められると結論づけている。
しかし新美はトレーニングの動作分析には及ん
でいない。筆者はトレーニングを通してカラリ
パヤットの実体に迫ることを目的としており、

新美の研究とは性質が異なっている。国外で
は、ザリリ Zarrilli (1979, 2003)の研究が主と
してあげられる。前者の論文(1979)では、カ
ラリパヤットの歴史、トレーニング内容や効果
が概観されているのに対し、後者の論文
(2003)は、C. V. N. カラリでの20年以上のトレ
ーニング体験を含めた参与観察、ケーララ州内
のカラリを対象とする広範なフィールドワーク
がおこなわれ、完成されたカラリパヤット研究
であるといえる。後者では、カラリパヤットの
古代から近代までの歴史も詳細に調べられ、ト
レーニング、医学、信仰、舞踊との関連につい
てもよく調査、考察されている。しかし両論文
には、先述と同様トレーニングの動作分析から
ホリスティックな性質を導出するミクロな視
点、さらに女性の立場からの視点が欠けている
と思われる。したがって本稿ではそれらに着目
する。バラクリシュナン Balakrishnan (2003)
は、自身のグルカルとしての経験を生かし、カ
ラリパヤットの概要を述べた上で、トレーニング
ごとの解説を中心に詳述している。それは教
授本としての意味合いが強いため、本稿ではト
レーニング内容を中心に依拠するにとどまる。

カラリパヤットは、ケーララ州北部を発祥と
するマーシャルアーツとして現地で認識されて
いる。「マーシャルアーツ」は、和訳では一般
に「武道」(小稲1995: 1304)、「格闘技」(小西
南出2001: 1349)である。また稲垣は「総合身
体修練法」(稲垣2001: 57)と述べ、河野は「古
武術」(河野1990: 138)、「古武道」(河野1991:
159, 1992: 763, 1994: 194)、「武術」(河野
1991: 151, 1999: 208)、宮尾、新美も「武術」
(宮尾1987: 184, 新美2001: 241)、石井は「伝統
武術」(石井1999: 50)、松浪は「格闘技」(松浪
1989: 208)、「伝統武術」、「古武道」(松浪1989:



写真1 G. K. K. S. のカラリの外観⁵⁾

209) と呼んでいる。このように研究者間でも名称の統一がされていない。また漢字表記をするにはマーシャルアーツの定義について徹底した議論が必要となり本稿の主旨と離れるため、本稿ではカタカナ表記を用いる。

1. カラリパヤット Kalaripayattu

1・1 カラリパヤットの概要

カラリパヤットの伝承地であるケーララ州は、面積約39000km²、人口約3200万人で、東の西ガーツ山脈と西のアラビア海に囲まれたインド西南部に位置する。公用語は州言語のマラヤラム語である。

カラリパヤットの「カラリ」とはマラヤラム語で教室、施設を、「パヤット」とはトレーニング、エクササイズを意味する。カラリはカラリパヤットがおこなわれる場所を指すのみならず、同州に伝承されるカタカリでも同様の意味で用いられる。カラリは、東に面した入口から階段2段ほど低い半地下に造られる。そのためカラリの内部は薄暗く、雨季でも比較的涼しく過ごせる。ナヌグルカルによれば、G. K. K. S. のカラリは東西約10m、南北約5 mの長方形を

しており、内部の地面と四方の壁は土、屋根はココ椰子の葉、骨組みはアレカナツツの木の幹でできた伝統的な造りである（写真1）。

カラリパヤットが指す体系には、脚のエクササイズ、それを組み合わせた基本動作のプーラトラルとメイパヤット、木製やメタル製などの武器の体系がある。メイパヤットでは、象、ライオン、馬、蛇、猫、鶏、猪、孔雀あるいは魚という8つの動物のポーズが組み込まれた動作が特徴的とされている⁶⁾。しかし筆者は、実際に動物の名称で説明を受けることはなかった。またインドの伝統医学アーユルヴェーダの理論に基づいて施されるマッサージのウリチルuzhichilも、カラリパヤットの体系に含まれる。先述のように、カラリパヤットを単に「武道」、「格闘技」などで置き換えられない所以はここにも存在する。

そしてカラリパヤットでは宗教、カースト、男女の別などは一切不問である。実際にG. K. K. S. の生徒たちは宗教やカーストも様々である。

1・2 カラリパヤットの歴史

カラリパヤットが起こった正確な時期は明らかではないが、主だったものを書くと以下のようになる。ザリリ(1979, 2003)によれば、カラリパヤットは2つの起源に遡ることができる。一つはタミル人⁷⁾、ドラヴィダ語族⁸⁾由来のもの、もう一つは中世ケーララ文化の中でおこなわれていた洋弓術ダヌルヴェーダである。

まず名称の由来を概観する。カラリパヤットの「カラリ」と「パヤット」という言葉は1世紀のタミル語に由来する。現在のカラリパヤットの体系になったのは後述のように11~12世紀で、20世紀になってようやく「カラリパヤット

ト」という名称が現在と同種の体系に使われ始めた。この背景には、ステージ実演、大衆文学や新聞記事など大衆消費のための必要性があった。

次にカラリパヤットの体系の由来を概観する。現存のカラリパヤットは、紀元前4世紀から600年までの古代タミルの英雄詩に見られる、戦いのマーシャルスピリットにまで遡ることができる。それはタミル人、ドラヴィダ語族がおこなったマーシャル実践を基礎とし、7世紀までに移住してきた最高位の司祭階級バラモンがもたらした階層性など、アーリア人の文化を受け入れていった。11世紀にはチェーラ朝とチョーラ朝との間で百年戦争が始まり、ケーララのカラリパヤットは、戦士の軍隊訓練のためのドラヴィダ語族のマーシャルテクニクに、バラモンの影響も混ざり合って発達した。こうしてこの頃、現在のカラリパヤットの原型が誕生した。マーシャルアーツが支配者への忠誠を示すための特権になり、11～12世紀からその特権はクリスチャン、ムスリムと同様、バラモンのサブカーストの一つナーヤル⁹⁾に与えられた。低俗のティヤというサブグループには、死闘のための武器の訓練の特権が与えられた。その後12世紀以降のカラリパヤットは大きく変化しないという。それは、ダヌルヴェーダとアーユルヴェーダの要素を統合し、加えて土着に発達した武器の使用技術、エクササイズ、マッサージによって形作られている。特にダヌルヴェーダは、弓矢の使用術に加え、武器への祈り、一点凝視や集中力など、死に直面するマーシャルアーツ実践者に欠かせない多くのことを教えた。15～17世紀までのカラリパヤットは、7歳よりトレーニングを開始するケーララ州の軍人カースト、ナーヤルの若者の正規教育だった。しか

しこの教育システムの実践は宗教、カーストの枠をすぐに超えて激増した。18～19世紀には、15世紀終わりにポルトガル人にもたらされた銃などの使用と英国統治の影響で、ナーヤルたちは伝統的な訓練や戦士としての役割から妨げられていった。カラリパヤットはこうして衰退の一途をたどるかに思われたが、19～20世紀初頭、数人のグルカルのおかげで絶滅の危機から救われたのである。

1・3 今日におけるカラリパヤット

ケーララ・カラリパヤット・アソシエーションは、ケーララ・スポーツカウンシルの一つとして1958年に発足した。本アソシエーション、カンヌール支部のアヴドゥルカデール氏によれば、カラリは現在ケーララ州内に約790ヶ所、カンヌール県内に85ヶ所ある。実際にトレーニングがおこなわれているカラリは75ヶ所存在する。そのうちの一つ、筆者が体験をおこなったG. K. K. S. は、G. K. K. S. 運営委員会に運営されている。カラリパヤットを習う生徒たちの月謝は、毎年委員会によって決定される。2004年度の月謝が200ルピー¹⁰⁾、2005年度の月謝が150ルピーであった。ここで得られた収入は、委員会、グルカルとそのアシスタントをしたグルカルの長男に与えられる。月謝のほかに、随時ダクシナ *dakshina* と呼ばれるお布施もある。たとえば、シーズンの始まりと終わりの時に、生徒からグルカルへ、ダクシナが手渡される。ダクシナの金額は設定されていない。これは受け取ったグルカルの収入となる。

3期に筆者は、州都のC. V. N. カラリを訪問した。カラリは近代的な建物の地下一階にあり、誰でも一階のバルコニーからカラリ内のトレーニングを見学出来る構造になっている(写



写真2 C. V. N. カラリの外観¹¹⁾

真2)。州都にあるためか、そこには学生ビザを持った様々な国の外国人が多くトレーニングに来ている。筆者はそこで数名の外国人に出会った。トレーニングに来ていたアメリカ出身の女性は、毎年州都に滞在し、3週間トレーニングに来るカリフォルニアのヨガ教師であった。見学に来ていた一人の女性は、2003年から2年間C. V. N. カラリで学んだフランス出身の女優であった。当時の月謝は500ルピーだったそうである。もう一人の見学者はインド系フランス人の女性だった。彼女は自国で息子にカラリパヤットを習わせるため、自国のグルカルが学んだC. V. N. カラリを見学に来ていた。カラリパヤットは日本ではまだ馴染みが浅いが、海外では既にダンサー、俳優などパフォーミングアーツを志す人々にとって魅力的な身体文化なのである。このように今日の状況では、カラリパヤットもカラリの形態を変え、積極的に外国人を受け入れ世界に進出するなどグローバル化されていると言える。けれども一方で、G. K. K. S. のようにカラリパヤットは伝統的な構造の土臭いカラリで、地域住民に受け継がれているのである。

4期には2人の青年がG. K. K. S. に来ている。

現在北インドで軍隊に従事する彼らは、軍隊でおこなわれる舞台発表会でカラリパヤットを披露するため、短期トレーニングに来ていた。彼らはカンヌール県と隣県の出身だが今回がカラリパヤット初体験であった。しかし彼らは、普段の軍隊訓練のため柔軟性に長けており、メイパヤットを次々と身につけていた。彼らのように、ケーララ州外へ出て初めて自らのアイデンティティを自覚しカラリパヤットを習い始める人々を目にすると、ザリリ(2003)も指摘するように、カラリパヤットはある種マラヤリー¹²⁾のアイデンティティを象徴していると言える。

2. 身体トレーニングとしてのカラリパヤット

2・1 トレーニング

G. K. K. S. のトレーニングは年2回のシーズンにわかれている。第1シーズンは6月から9～11月頃までである。その後一旦トレーニングは休止され、第2シーズンは12月頃から2、3月頃までである。前期は雨季で、後述のウリチルに最適なシーズンでもある。3月以降は猛暑の時期のため避けられる。このようにトレーニング時期は一応設定されているものの不規則で、生徒の学校行事など諸事情次第で毎年決定される。

G. K. K. S. では、師匠のナヌグルカルが健康上の理由から椅子に腰掛けたまま声がけをおこない、主に長男がアシスタントとして実質的な指導にあたる方法をとっている。生徒は、1期では5歳の少女1名を含む5～40歳の男女であった。3、4期でも9歳の少女1名を含む約80名の生徒がいた。トレーニングの時間は、毎日朝5時、夕方5時の2回設けられているが、実

表1 脚のエクササイズの概要 (筆者作成)

名 称	動 作 内 容
①ネルカル Ner Kaal	右脚から順に前上方向へ蹴り上げる動作。足先は掲げた同じ側の手のひらに当たるように180度上げなければならない。
②ティルチュカル Thiruchu Kaal	一旦ネルカルで上げた脚を下ろし、着地させずに片足で身体の向きを180度方向転換させ、その方向でもう一度ネルカルをおこない、再度片足で180度方向転換して進行方向に向き直る動作。①と同様足先は同じ側の手のひらに当てねばならない。
③ヴィドゥカル Veethu Kaal	右脚から順に外回しで、180度上げて、回し蹴りのように脚をスウィングさせる動作。①②同様足先は同じ側の手のひらに当てなければならない。
④アカムカル Akam Kaal	③の逆で、右脚から順に内回しで、180度上げて、回し蹴りのように脚をスウィングさせる動作。足先は反対側の手のひらに当てなければならない。
⑤コーンカル Kone Kaal	右足先を頭上に掲げた左手のひらにタッチさせるよう、脚を斜めに蹴り上げる動作。
⑥イルティカル Iruthi Kaal	①の後、上げた足を後ろに引いて膝を立てて腰をおろし、軸足であった方の膝を伸展させ前に出し座る。その後上肢と体幹を蛇のように地面すれすれの位置から地面に沿って起こし立ち上がる動作。
⑦ティリチルティ Thirichiruthi	⑥で地面に沿って起こすとき、続けて180度方向転換するため、そのまま腰の側屈、背屈を通過して反対方向に方向転換し座る動作。

際はシニアの生徒が朝もしくは夕方、ジュニアの生徒はたいてい夕方に来ている。男子生徒らはカッチャと呼ばれるふんどし一枚を身に着け、アーユルヴェーダのオイルを首から足先まで全身に塗ってトレーニングを開始する。

2・1・1 脚のエクササイズ

カラリパヤットのトレーニングは、性別、年齢、経験年数を問わず、生徒が自主的におこなう脚のエクササイズから始められる。文献ではこのエクササイズは12種類とされているが(Balakrishnan, P: 2003), G. K. K. S. では表1のように7種類がおこなわれている。一つ目は①ネルカル Ner Kaal である。ネルとはまっすぐ、カルとは脚を意味する。次は②ティルチュカル Thiruchu Kaal である。ティルチュとは、回転を意味する。次は③ヴィドゥカル Veethu Kaal である。ヴィドゥとは、スウィングを意味する。次は④アカムカル Akam Kaal である。

アカムとは、内側を意味する。③、④では、筆者は、脚の軌跡がはっきりと大きい弧を描くようにと指導された。次は⑤コーンカル Kone Kaal である。コーンとは角度を意味する。次は⑥イルティカル Iruthi Kaal である。イルティとは座ることを意味する。最後は⑦ティリチルティ Thirichiruthi である。生徒らは必ずカラリ内の東側からこれらを始め、西側へ向かって進み、その後は東西を往復する。すべての脚のエクササイズの間、両上肢は頭上へ掲げ、万歳の状態に保持される。筆者は視線を常に掲げた両手のひらに向けるよう指導された。なかでも最も要求されたのは、①から⑦までの蹴り上げる素早いスピードである。それはこのエクササイズが第一に自己防衛として欠かせないものであり、第二に敵への攻撃としても必須なためであると思われる。そしてナヌグルカルによると、カラリパヤットで最重要なことは身体の柔軟性である。筆者も体験を通して、このエクササイ



写真3 「トールドウ、アマルヌ」の姿勢

ズには股関節を柔軟にする目的も含まれていると感じた。

2・1・2 プータラトラル Poothara Thozhal とメイパヤット Mey Payattu

生徒たちは脚のエクササイズを終えるとプータラトラルと一連の動作を組み合わせたメイパヤットへ進む。プータラトラルは後述するプータラという祭壇に向かっておこなわれる。これはプータラの方を向いて右足を出し、右手で地面に触れ祈りを捧げることから始まる。一連の動作はプータラを正面としておこなわれる。最後までその方を向き、最初と同様の方法で祈りが捧げられる。これを終えてからメイパヤットのトレーニングに入る。筆者は4度の体験で計7種類のメイパヤットを学んだが、一日一回のトレーニング中におこなわれるのはたいてい2, 3種類である。東側に数人の生徒が横一列に並び、グルカルの声に従い西側へ進みながら一番目の第1メイパヤットから順におこなっていく。

メイパヤットは、必ず「トールドウ、アマルヌ」の姿勢からスタートする（写真3）。これは、手のひらから肘までを合わせた両腕で、頭

の先から股関節までの身体の中心部分を防衛する姿勢である。この部分には、アーユルヴェーダに基づいた身体に108ヶ所あるマルマン marmmam と呼ばれる急所、つぼが集合している。この姿勢は、前方からの不意な攻撃を両腕ではらったり両腕で突いたりすることによって自己防衛する重要な姿勢である。そしてその後脚のエクササイズを含む一連の動作が続く。第1メイパヤットでは、①, ②のエクササイズにジャンプ、上肢動作、背屈などが組み合わされる。第2メイパヤットでは、③, ④, ⑤のエクササイズにジャンプなど、第1メイパヤットと同様の動作が組み合わされる。つまりメイパヤットは①から⑦の脚のエクササイズを取り入れて、上肢動作、体幹の前屈と背屈、それらに左右の側屈を加えて一息におこなう3回連続のブリッジなどが加わり、複雑な動作になっている。そして脚の蹴り上げの際、掲げた両手のひらに足の甲が触れるよう高く上げることや、ジャンプの際、高さが最高点に達することを指導されたことからわかるように、股関節、腰部などを柔軟にしつつ運動能力を養うのである。

2・1・3 武器

武器は8種類あるとされる（写真4）。筆者は3, 4期にチェルヴァティ cheruvati（写真5）、ケットウカリ kettukaari（写真6）の2種類を学んだ。武器では、二人一組でメイパヤットでおこなった一連の動作を踏まえた型をこなしていく。武器では身体のマルマンへの攻撃と防衛を教えられるというが、筆者はそこまで達しなかった。どちらをおこなう場合でも、相手は常に敵であると指導され、敵の目だけを見て、武器を見ることは禁止される。ここにカラリパヤットの真髓が現れているように思われる



写真4 武器



写真5 チェルヴァティ (右, 筆者)

が、これが筆者に、武器に対する恐怖、緊張、体力の消耗をもたらした。

2・2 グラフノーテーションによる動作分析

本節では、カラリパヤットのトレーニングの動作特性を客観的に理解するため、舞踊動作分析に用いられる舞踊記譜法のグラフノーテーションを用いて分析をおこなう。グラフノーテーションはラバノーテーションを簡素化したもので、動作の把握に役立ち、ラバノーテーションよりも比較的理解しやすいため選択する(Kealiinohomoku: 1976)。分析対象は実質的指導者であるナヌグルカルの長男シャイレシュ氏が重視する、メイパヤットのうちの①第1メイパヤット、②第2メイパヤット、③第3メイパヤット、④第6メイパヤットの4種類とする。分析方法は以下のとおりである。グルカルの一流れの声がけを最小単位のフレーズとして、第一に4種類のメイパヤットをそれぞれフレーズに分類する。第二に各フレーズをグラフノーテーションにより記譜し、動作特性を把握する。第三に各メイパヤットのフレーズ構成をみる。そして各メイパヤットにおける動作特性を明らかとする。

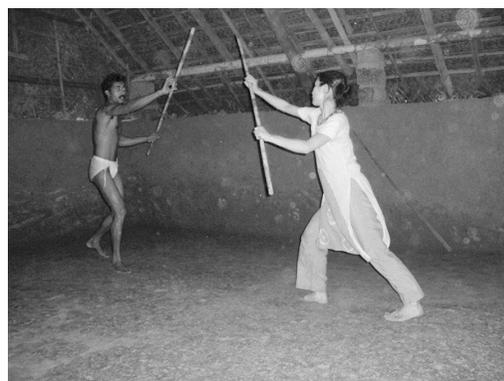


写真6 ケットウカリ (右, 筆者)

その結果、次の8点が明らかとなった。1、表2より、4種類のメイパヤット全体で現れたフレーズはA～Zまでの合計26種類である。2、フレーズ26種類各々を見ると、表2より上肢のみ使用が1種類、上肢と体幹使用が1種類、上肢と下肢使用が2種類、体幹のみ使用が0種類、体幹と下肢使用が0種類、下肢のみ使用が9種類、上肢、体幹、下肢のすべて使用が13種類であり、下肢のみ使用のフレーズと、すべて使用のフレーズの2つが主要である。たとえばフレーズAのグラフノーテーション結果である図1は、始めに両上肢の動作が見られ、次に体幹と両下肢動作が見られることを示している。3、身体の使用部位を見ると、表2より26

種類のフレーズ中の出現回数は、上肢17回、体幹14回、下肢24回であり、下肢はフレーズの大半で使用されている。4、上肢動作に着目すると、両上肢は、万歳の状態以外はたいいて体幹前面で動作が見られる。図1では動作開始時、両上肢は体側から体幹前面に至り、その後体幹前面にある(以下、表3参照)。図2ではジャンプの際、両上肢は体幹前面にあり、その後前方へ突き出されているのがわかる。5、一方、両上肢の万歳の状態は、図3のように脚のエクササイズ①から⑦を含むフレーズに必ず見られる。6、下肢動作に着目すると、自らの体験では左下肢から動作を開始するフレーズが大半を占めると思われたが、分析からは表2のように右下肢開始と左下肢開始の割合は10:12で、著しい差は見られない。7、フレーズ内の体幹動作と下肢動作の関係に着目すると、表2より26種類中体幹を使うフレーズは14種類、体幹を伴わず下肢だけを使うフレーズは10種類である。8、図4より、対象に共通して見られたフレーズはA, B, C, D, G, H, I, M, Nの9種類である。身体をすべて使用するフレーズが5種類、上肢と下肢使用が2種類、フレーズMとNは最後の祈りのフレーズである。共通な組み合わせは、「ABBCD」, 「GGHID」, 「GGMA'N」の3種類である。特にフレーズAは必ず対象各々の始めと終わりに見られる¹³⁾。

以上から次の4点が考察される。1、結果2、8よりトレーニングでは上肢、体幹、下肢がバランス良く用いられている。また結果2、6より右下肢開始と左下肢開始の割合でも大差ないことから、左右の軸足を等しく鍛錬する目的も考えられる。したがってこれはバランス良いからだ作りのための理想的なトレーニングであると考えられる。2、結果3より、下肢

は26種類中24種類で使用されており、全体を通して下肢の鍛錬が重要であるとも考えられる。理由は下肢による自己防衛と、下肢による攻撃に由来すると考えられるためである。3、結果4より、体幹前面で上肢動作が見られるのは、上肢による自己防衛と、上肢による攻撃に由来すると考えられる。特に上肢による自己防衛は、体幹前面に集中するマルマンを防衛するためである。4、結果5より、下肢動作の際に上肢動作が万歳の状態に保持されることは、下肢の鍛錬に集中できるため、あるいは前上方向への蹴り上げの際上肢が下肢の邪魔にならないためとも推察できる。したがってカラリパヤットは、身体をバランス良く用いた全身運動、上肢と下肢を用いた自己防衛と攻撃を目的とする、からだ作りのためのトレーニングであると考察される。これまで見てきたようなトレーニングの効果は、肉体面では柔軟性、身体のバランス、コントロール、強さ、素早さ、しなやかさ、精神面ではスタミナと集中力などが挙げられている(Zarrilli: 1979)。これらはトレーニング体験を通して筆者が感じたことであるが、さらにグラフノーテーションによる分析結果が肉体面の効果を裏付けているといえる。

3. 医学としてのカラリパヤット

3・1 予防医学

本章では筆者の参与観察を通して、カラリパヤットの医学としての機能について見ていく。医学には疾病を防ぐための予防医学と、疾病を治すための治療医学が考えられる。カラリパヤットではその両方の性質が見られる。そこでまず前者について見ていく。

第一に先述の動作分析から、カラリパヤット

表2 各フリーズの概要 (筆者作成)

フリーズ 種類	身体の使用部位 ¹⁴⁾			動 作 内 容
	上 肢	体 幹	下 肢 (動作開始下肢 ¹⁵⁾)	
A	○	○	○	両下肢を肩幅に開き、両上肢は体側を通り頭上で合掌させ体幹前面へ、その後両膝屈曲と同時に体幹は頭部から前屈し地面と水平で保持し、「トールドゥ、アマルス」の姿勢に至る。
B	○	○	○ (▲)	体幹前傾のまま両上肢で前方へ突いた後左下肢スタンプ、体幹を起こして両上肢頭上へ、右下肢を前方へ出す。その後右下肢より後進。
C	○	○	○ (▲)	左下肢前上方向に蹴り上げた後、左下肢踏切で両足ジャンプ、両上肢は前方突きから体幹前面に屈曲。その後前進し体幹を前傾させた姿勢で上肢は体幹前面に保持。
D	○		○ (▲)	両上肢を体幹前面から万歳の状態にし、それに伴い左膝を伸展し両下肢を揃え直立姿勢。
E			○ (▲)	①ネルカル
F	○	○	○ (△)	右下肢よりホップして右下肢軸で180度方向転換、その間左膝を屈曲。その後体幹を前傾させた姿勢で上肢は体幹前面に保持。
G	○	○	○ (▲)	左下肢を前に出し、体幹前面で両上肢を交差させ保持から、左上肢を前方へ突くのと同時にと右下肢で前進。
H	○		○ (△)	両上肢は万歳で右下肢を前方へ出すが、両上肢を体側にして右下肢より後進。その後右下肢で踏み切り前方へ右下肢を蹴り上げジャンプ。
I			○ (△)	両上肢は体側のまま後進。
J			○ (▲)	②ティルチュカル
K	○	○	○ (△)	右上肢前方、左上肢は胸の前で屈曲して体幹前傾から、両上肢を体幹前面で交互に万歳の位置へ。同時に直立姿勢になり後進。
L	○	○	○ (△)	右膝は屈曲で、左下肢のみで180度方向転換をしながら体幹は左の側屈から背屈を通り正面を向く。同時に両下肢肩幅に開き、両膝屈曲で両上肢を体幹前方で合わせ、両親指だけ立てた握り拳でアマルスの姿勢に至る。
M	○	○	○ (△)	プータラに対して両上肢万歳で右足前方に出す。左下肢を前方へ大きく出し膝屈曲、右上肢を後方から前方へ出し、体幹は前傾。体重を右足に移動させながら、体幹を最大限屈曲させて頭部は地面に近い位置でもぐりこむように180度方向転換し、右膝屈曲し、両上肢を前方へ突く。さらに右下肢を後方へ引き180度方向転換して再びプータラに向きながら、左上肢は胸の前、右上肢は頭部周りをなぞるようにして胸の前に持ってきて合掌。左下肢が前方に出て、体幹は前傾傾向にある。
N	○			右手のみで地面、額、胸の順に触れ、3回繰り返す最後の折りの動作。
O			○ (▲)	③ヴィドゥカル

P			○ (△)	右下肢で踏み切り、180度回転しながら右下肢を前上方向に蹴り上げジャンプする。
Q			○ (△)	両上肢体側で後進。
R			○ (▲)	④アカムカル
S	○	○	○ (△)	右膝屈曲のまま左下肢軸で180度方向転換、その後体幹を前傾させた姿勢で上肢は体幹前面に保持。
T			○ (▲)	⑤コーンカル
U	○	○	○ (▲)	⑥イルティカル（前上方向に蹴り上げた下肢を後ろに引いて膝を立てて腰をおろし、軸足であった方の下肢を前に伸ばす。）
V	○	○	○ (▲)	⑥イルティカル（その後、180度方向転換するために、上肢と体幹を蛇のように地面すれすれの位置から起こす）
W	○	○	○ (▲)	⑦ティリチルティ
X			○ (△)	右下肢から後進した後、右下肢踏み切りで360度方向転換する回転ジャンプ。
Y	○	○		両手を地面から離さず、前屈、側屈、背屈、側屈という一連の体幹の動作（ブリッジ）。
Z	○	○	○	前屈、背屈をして直立姿勢になり、再度前屈したのち両下肢でジャンプ。
出現回数	17	14	24 (右：左=10：12)	

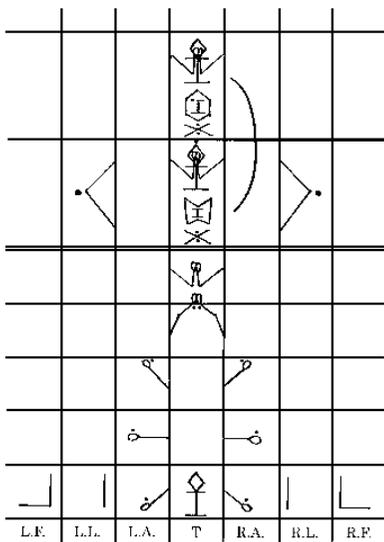


図1 フレーズA グラフノーテーション結果¹⁶⁾ (筆者作成)

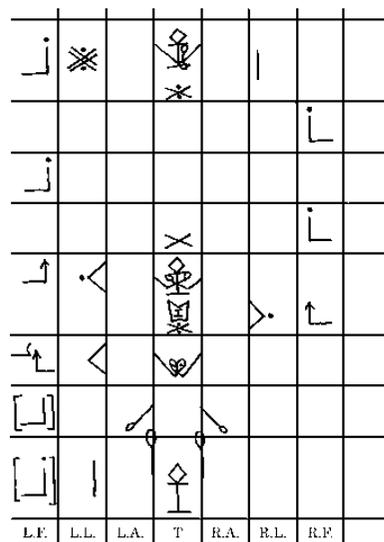


図2 フレーズC グラフノーテーション結果 (筆者作成)

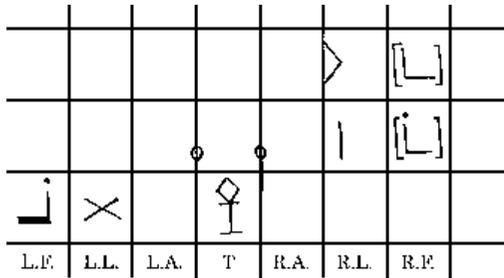


図3 フレーズE グラフノーテーション結果 (筆者作成)

表3 グラフノーテーション記号解説 (筆者作成)

記号	説明	記号	説明
●	●の方向に動作を及ぼすことを表示	⌈I⌋	この姿勢を表示
×	緩む程度の角度表示	⌈/ /⌋	スティックで表示
※	90度の角度表示	>	膝屈曲
※※	最大限の角度表示		膝伸展
◇	顔面	L	足を置く
I	体幹(肩と脊柱と腰をスティックで表示)	L	スタンプ
⌈I⌋	この姿勢を表示	⌈I⌋	リープ(ハイジャンプ)
		[]	浮かせる

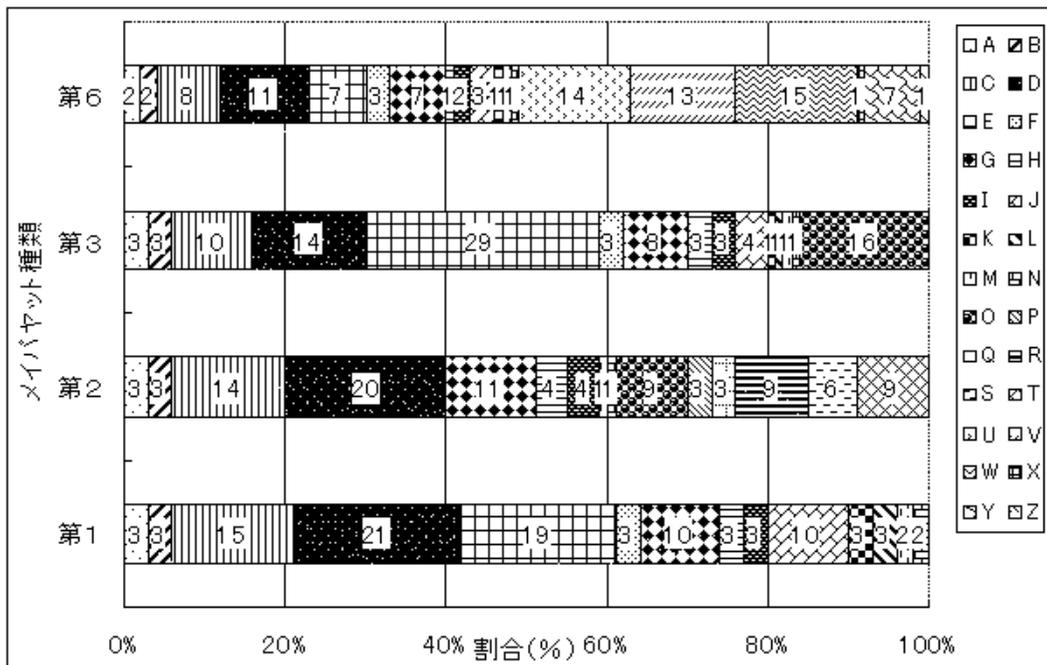


図4 メイパヤット4種類におけるフレーズA～Zの割合 (筆者作成)

のトレーニングでは全身がバランス良く使用されていることが考えられた。これは医学的に疾病を予防するためのからだ作りと考えられる。というのも、バランス良い全身運動では健康維

持に欠くことのできない身体の柔軟性が強化されるためである。たとえばメイパヤットにも含まれる脚のエクササイズ③, ④, ⑤は股関節を柔軟にし, ⑦は股関節, 首や背中などの体幹を



写真7 自宅での治療の様子（左、ナヌグルカル）



写真8 カラリでの骨折患者への治療の様子

柔軟にするような動作である。生徒らはフレキシブルな身体を目指して、みな全身にオイルを塗ってトレーニングを開始する。つまり、股関節を中心とする柔軟性は、トレーニングで第一に重要な性質であるのみならず、後述のウリチルでも見られるように健康の第一条件としても考えられている。トレーニングには個人の能力に合わせた無理のない運動強度、ゆるやかな指導方法、ゆったりとした風土も加味され、全身運動、自己防衛、攻撃のためのからだ作りにとどまらない、心身に有利な医学的効果があるといえる。

第二にトレーニングで見られる動作は女性の健康にも効果的である。ナヌグルカルによれば、メイパヤットの最初におこなわれる「トールドゥ、アマルヌ」の姿勢は女性の子宮に効果的で、日頃この動作をおこなっていれば、生理痛の解消や出産時の楽な分娩などの効果がある。カラリは神聖な場所である。そのため女性の赤不浄の概念が成り立ち、女性は排他的な存在であると思われがちだ。けれども実際には、女性の健康なからだ作りも意識されているのである。以上のようにカラリパヤットは、疾病予防のための健康なからだ作りとして機能すると

考えられる。

3・2 治療医学

カラリという場は、随時接骨院へと姿を変える。ナヌグルカルは、周囲の地域住民にとってはカラリパヤットの指導者であるとともに、接骨医でもある。そしてカラリのみならず自宅でも治療をおこなっている。これは G. K. K. S. に限ったことではない。1期から4期のほぼ毎日、老若男女問わず2、3名の患者がカラリへやって来た。たいていは四肢の捻挫、打撲、時には骨折患者も見られた。グルカルは本人や付き添いの者に怪我の状況を聞きながら部位に手を当て、内部の骨や筋の状態を探りながら治療法を判断する（写真7）。レントゲン撮影などに拠るわけでもなく、ただ自身の感覚と経験を頼りに治療する。筆者が目にした限り、また筆者自身が足の指を捻挫した際も、グルカルは患部にアーユルヴェーダに基づいて調合した塗り薬を塗っていた（写真8）。つまりカラリパヤットは、アーユルヴェーダに基づく治療の医学としても機能していると考えられる。

3・3 ウリチル *uzhichil*

ウリチルとはマッサージのことである。ウリチルにはリラクゼーションや身体の柔軟性強化のために用いられるスガウリチル、リウマチ患者に対しておこなわれるピリチルなど目的別に名称がある。筆者が観察した患者らはみな前者を受けていた。ウリチルでは、アーユルヴェーダに基づくオイルを使用する。オイルは患者の状態や目的と相談してウリチルの前に決定される。このオイルにも膨大な種類がある。たとえば、バラージュワガンダーディタイラムというオイルはすべての人に適しており、日々生徒らがトレーニング前に身体に塗っているものである。それに対しサハチャラーディタイラムは、老人のみに適しているオイルである。

ウリチルは、カラリパヤットの雨季シーズンが最適とされ、一人の患者に対し14日間継続でおこなわれる。第1～2日目、患者は直立のままウリチルを受け、治療師は両手だけを用いてウリチルを施す。第3～7日目は、患者は横たわり、治療師が手と足を用いて施す。このとき治療師は、写真9のように天井から垂らされたロープを手でつかみ、足を使っておこなう。そして第8日目に患者はアーユルヴェーダに基づく下剤を服用し体内を浄化する。食事もお飯をお湯に浸した栄養価の高いものと決められていて、この日はウリチルをおこなわず身体を休める日である。第9～13日目は、第3～7日と同様、第14～15日目は第1～2日目と同様の方法でウリチルがおこなわれる。こうした流れの中で、前半、治療師は8日目に向けて次第に力を強めてウリチルを施し、後半は次第に力を弱めていく。患者は揉み返しなどの副作用を感じないそうで、ウリチルが長期的におこなわれるため身体への負担も少ないと思われる。

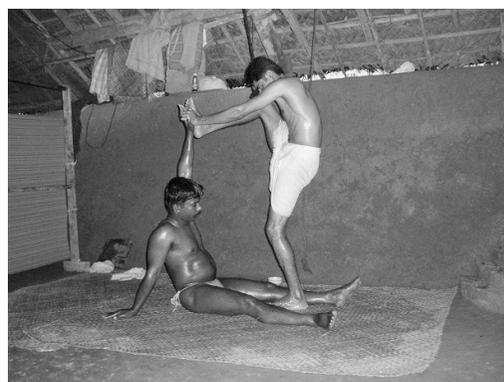


写真9 シャイレージュ氏によるウリチルの様子

治療師は、はじめに患者の横たわるパヤというマットに祈り、患者に触れる前にも患者を神聖なものとして扱い祈りを捧げる。治療師にとってウリチルが危険な仕事であるため、神への祈りは欠かせない。一方患者は東に頭を向けて横たわる。これは日の出の方向であることとかわりがあるようだが、磁力も関係しているという。次に必ず患者の脈拍を測り、その日の患者の体調を把握する。ウリチルで14日間同じ治療師が同じ患者を担当するのも、患者の日々の体調の変化を察知するためである。そして、武器の体系でも見られたアーユルヴェーダに由来するマルマンの概念に基づいてウリチルが始められる。たとえば背中では、脊柱と腰骨を結ぶ5点のマルマンを逆Tの字を描くようになぞるところから始められる。さらに、股関節がより回外するよう、治療師は自らの両手足を用いて患者の両脚に圧力をかける。当然患者は苦痛を訴えるが、柔軟性はカラリパヤットのためのからだ作りに加え、医学的な面からも欠かせないという。ウリチルでも柔軟性は健康なからだを作るために重要視されていると考えられる。つまりウリチルは、脈拍計測、食事制限などの患者の体調管理、柔軟性を強化させるからだ作りを



写真10 プータラ（左）とグルスタン（右）

含む予防医学であり、マルマンの概念を用いた治療医学であると同時に、パヤや患者を神聖視するという独自の信仰に根ざした医学と考えられるのである。

以上のようにカラリパヤットは、アーユルヴェエダを基盤に次のような医学として機能している。第一に全身がバランス良く使用され、女性の健康も考えられ、さらにウリチルでの脈拍計測、食事制限など患者の体調管理や柔軟性強化も含めた、疾病予防のための健康なからだ作りの医学という機能である。第二にグルカルによる治療と、ウリチルでのマルマンに基づく長期的な治療の医学、そして第三に信仰に深く根ざして人間を全体的に扱う医学という多機能を果たしていると考えられる。

4. 信仰としてのカラリパヤット

4・1 カラリの内部構造

カラリパヤットには、ケーララ社会に土着の信仰が反映されている。河野は、カラリは「寺院と同じ聖域」（河野1992: 764）であると述べている。そこで、本章ではカラリパヤットの背景に見られる信仰について、カラリの内部構造

と慣習という観点から考察する。

カラリの内部には、プータラ Poothara とグルスタン Gurusthan が置かれている。G. K. K. S. のカラリに入ると、西南の隅にプータラと呼ばれる祭壇が設けられている（写真10）。この祭壇は、上方から見ると扇形をしており、階段状に7段ある。ここには、カラリパラデーヴァタという女神が祭られているというが、偶像はない。この女神はケーララ州に土着の女神バガヴァティと同一視されるもので、さらにはヴィーラバッドランというシヴァ神と同一視される神と、バドラカーリーというシヴァ神の妻パールヴァティと同一視される女神が半分ずつからなるアルダナーリーシュワラン女神でもあるという。この女神は守護神としてどこのカラリにも祭られている。プータラの地上からの高さは全長27ヴィラル *viral*¹⁷⁾ であり、最下段の円周の長さも同様である。この27という数はすべての人が産まれた時に与えられる星の数に相当する。この星は、現在でもケーララ社会で見合い婚の時には必ず用いられる重要なものである。占星術師は当事者の男女の星の相性などで彼らの結婚について占う。こうした意味をもつ27という数は、全世界の人々を象徴すると同時に、宗教やカーストを一切問わないというカラリパヤットの特異性も象徴しているのである。またプータラの各段には名称がある。最下段の1段目から6段目までには人間の腺、ホルモンに関する名称がつけられている。たとえば、最下段はムーラアダーラムチャッカラムという。チャッカラムとは急所、つぼを指し、これはホルモンを生成する腺をコントロールするという意味をもつ。そして6段目は、アーンニャチャッカラムという。これは脳から指令を出すという意味をもつ。このようにプータラは医学との結び

つきが強い信仰の対象である。

一方グルスタンは、グルカルの総称を祭る祭壇である(写真10)。G. K. K. S. ではプータラの北側に置かれてあった。これは直方体で椅子をイメージしているという。

カラリの内部構造に表されるように、カラリパヤットの背景にはケーララ社会の信仰体系を反映しつつも宗教、カースト不問の独自の信仰が見られる。さらにそれは医学との密接なかわりを持って成立しているのである。

4・2 カラリでの慣習

先述のように、カラリはケーララ社会における寺院と同様の神聖な場所として捉えられている。そのため、ここには女性に対する赤不浄の禁忌が存在する。月経にあたる女性は穢れた身体を持つとされ、5日目まではカラリに立ち入ることは禁止される。これはケーララ州内のいかなる寺院でも同様で、そうした女性は各家々の祭壇に触れること、朝晩の礼拝時に使用するランプ台に触れることも決して許されない。

カラリに入る時点から厳格な慣習は存在する。生徒はみな、カラリに入る際、まず右足から地面に着地する。次に右手でカラリ内の地面に触れ、自分の額、胸の中央と順に触れていく。これを3回繰り返した後、右に自転するような形で振り返り、プータラの方へ向かって歩く。その後プータラに対して、同様に右手で触れ、自分の額、胸の中央と3回触れて祈る。次に、グルスタン、グルカルの足元にも同様におこなう。こうした一連の礼拝を終えた後、生徒らは全身にオイルを塗り、ようやくトレーニングを開始することができる。カラリを退場する際も同様にプータラからおこない、最後は信仰の対象に背を向けぬよう後ろ歩きで出入口まで

進む。そしてウリチルでは、治療師にとって、プータラ、グルスタンと同様に、パヤ、患者の身体も祈りの対象となる。ウリチルが致命的な危険を常に伴うため、安全を祈願してそれらも信仰対象とされるのである。

このようにカラリパヤットの背景には、ケーララ社会を反映した厳格な信仰や慣習、宗教、カーストの別を問わずすべての人間を受け入れるという特異な信仰体系、そして医学と密接にかかわった信仰体系が共存していると考えられる。

5. カラリパヤットのホリスティック性

これまで筆者のトレーニング体験とグラフノーテーションを主として用い、身体トレーニング、医学、信仰の視点からカラリパヤットを捉えてきた。その結果カラリパヤットは多様な要素を満たしていると考えられる。

第一にカラリパヤットは全身運動であり、自己防衛、攻撃を目的とするからだ作りの身体トレーニングであると考察される。具体的にはグラフノーテーションによる分析結果から、これは下肢の鍛錬に重点をおきつつも、上肢、体幹、下肢と左右をバランス良く用いたトレーニングである。これは人間のからだに理想的な全身運動として機能していると考えられる。上肢に着目すると、これは体幹前面に上肢を保持することでマルマンを守る自己防衛とともに、攻撃を目的としたトレーニングである。下肢も同様に、それは自己防衛と攻撃を目的となると考えられる。これは競技に勝つためではなく、万が一敵に襲われたときに身を守る、生きるための身体トレーニングなのである。

第二にカラリパヤットは、アーユルヴェーダ

に基づき、疾病予防のための健康なからだ作り、治療、信仰に根ざして人間を全体的に扱う医学であると考察される。トレーニングは先述のような全身運動に加え、女性の健康も含めた健康増進のためのからだ作りである。ウリチルは14日間継続した脈拍計測や食事制限を含む患者の体調管理、健康のために必須な柔軟性強化の意味も持つ。これらは広く疾病の予防を目的とする医学と考えられる。グルカルはアーユルヴェーダに基づく豊富な知識から治療をおこない、地域では医者として機能する。ウリチルは、同様の理論に基づくオイルを使用したマルマンの治療としても機能する。これらカラリパヤットの医学的機能は、人間を部分的に扱う西洋医学とは異なり、患者を神聖視する独自の信仰に基づき、食事から長期的治療法に至るまで人間を全体的に扱うホリスティック医学の要素を満たすといえる。

第三にカラリパヤットをおこなうカラリは、信仰の場でもある。カラリにはヒンドゥー教由来の女神が祭られ、トレーニングでもウリチルでもケーララ社会の厳格な慣習に従っている。しかし、カラリパヤットは宗教、カースト、男女差など不問の特異性も同時に持つ。こうした信仰に見られる、全人類を受け入れるところにも、カラリパヤットの全人的な性質が現れていると考える。

そして最終的にカラリパヤットとは、身体トレーニングと医学と信仰という3つの要素を持ちながら、それらの要素を包含したマーシャルアーツであると考察される。身体トレーニングとしての「トールドゥ、アマルヌ」の姿勢は、頭部から股関節までのマルマンを両上肢で覆い、身体の致命的な箇所を守る自己防衛であり攻撃である。それと同時にその姿勢は生理痛解

消など子宮に有効であり、女性にとっては予防医学の機能も持つ。ウリチルはカラリパヤットのトレーニングをおこなう上で最重要とされる柔軟性強化を目的とするからだ作りである。と同時に、その柔軟性強化は疾病予防のための健康なからだ作りの意味も備え、腰や膝の痛みを訴える患者への治療としても機能する。信仰対象であるプータラはヒンドゥー教の教義に則っているが、宗教などは不問の特異性も併せ持つ。そしてそこには人間のホルモン、腺に関する名称がつけられ、信仰と医学との密接な関連も見られる。このようにカラリパヤットは3つの要素を満たしつつ、それらが統合されたマーシャルアーツである。これは勝つことだけを目的とした結果心身のアンバランス状態を招くような、競技化された近代スポーツの対極に位置されると考えられる。すなわちこれは、人間が人間らしく生きるために不可欠な、肉体と精神のバランスを重んじたホリスティックなマーシャルアーツなのである。

おわりに

筆者は、現在南インド、ケーララ州北部に伝承されるテイヤム Teyyam の舞踊の研究をおこなっている。テイヤムは一定のカーストの男性により、世襲で伝承されている儀礼である。筆者が伝承者たちへのインタビューをおこなう中で、また先行研究を検証するうちに、彼らが幼少時にカラリパヤットという同州の伝統的なマーシャルアーツを経験するという事実が明らかとなってきた。そこで筆者はテイヤムの舞踊と関係のあるカラリパヤットの研究をおこなうことにした。その結果、自らのトレーニング体験から、カラリパヤットが舞踊実践者にとっても

有益な動作であるという見解が得られた。このように舞踊研究から発生した本稿は、筆者のほんの2年間の調査の総括に過ぎない。そのため今後は次のような課題を残している。第一に現地での体験を継続し、文化人類学的により深く長期調査をおこなうことである。その上で、第二に調査地における舞踊と武術のかかわりを深化させ、それらと社会、文化とのかかわりに視野を広げることである。本稿を執筆する過程で、カラリパヤットには信仰などケーララ社会の人々の生活が色濃く現れていることがわかり、短期調査だけでは社会、文化を理解することに限界を感じたためである。

日本では1987年に日本ホリスティック医学協会が設立され、西洋医学においても東洋的な身体の捉え方が見直されてきている。世間では爆発的なヨガブームに代表されるように、健康、癒しをキーワードとする身体文化への注目が高まっている。こうした時代に応じるように、単なる武術や格闘技として捉えられないカラリパヤットの価値が、わが国で日の目を見るのも時間の問題であろうと思われる。

最後に、本稿執筆にあたってケーララ州カンヌール県のナスグルカル一家をはじめ、クッティシヤンカランマスター氏家族には幾度となく大変お世話になった。心より感謝の意を表します。なお本稿の一部は、平成17年度笹川科学財団による研究助成金を得ておこなわれた。ここに改めて御礼申し上げます。

注

- 1) 河野 (1992, 1994) に依拠して「ホリスティック」を信仰などのケーララ社会の生活と養生、心身の教育が一体となり全体の整合性を重んじる性質として捉える。NPO 法人日本ホリスティック医学協会ホームページによれば、「ホリスティック」はギリシャ語の *holos* 「全体」を語源としており、「全体」「関連」「つながり」「バランス」といった意味をすべて包含する言葉として解釈されている。1926年にスマッツ J. C が『ホリズムと進化』の中で *holism* の形容詞として「Holistic」という造語を用いたのが始まりだとされている。また医療人類学的には、ホリスティックのほか、全体性、包括性といった捉え方も考えられる。
- 2) 石井はタラッシュェーリ *Thalassery* (石井 1999: 51)、河野はテリリッチェリ *Tellicherry* (河野 1990: 139) と表記しているが、前者が州言語、後者が英語であるため本稿では前者を用いる。
- 3) 16世紀に登場した英雄タッチョーリオテナンと決闘したことで有名なカディールールグルカルがいた地で、カラリパヤットゆかりの地である (Jacob, K. ed.: 1972)。
- 4) グルカルとは師匠を意味する。
- 5) 1期当時、カラリが新しく開校したばかりであったため屋根には飾りが吊り下げられている。また撮影時は筆者を送る会が開催され、多くの来賓客が入口前に腰掛けていた。
- 6) ザリリ (2003) によればグルカルにより多少の違いが見られる。
- 7) ドラヴィダ語族のうちのタミル語を話す民族をタミル人といい、南インドの南東部とスリランカの北部、東部に居住している (辛島: 1992)。
- 8) おもに南インドで話されるドラヴィダ語族に属する諸言語を用いる民族をドラヴィダ人といい、インド・アーリヤ民族 (アーリヤ人) と並ぶインドの二大主要民族 (重松: 1992)。
- 9) インド南部のケーララ州に集住する有力なカーストの一つで、ケーララ州人口の15%を占める。その内部は、いくつもの内婚集団に分かれ、領主・戦士層ナーヤルから上位カーストの衣服の洗濯をする社会的地位の低いナーヤルまで含む (粟屋: 1992)。
- 10) 1ルピー=約2.66円。
- 11) 入口を入り右側の地下一階にカラリ、入口の左側の一階に待合室、奥に診察室がある。
- 12) ケーララ州の州言語マラヤラム語を話す人々を。

- 13) A' とは図1のAの6段目以降を示す。
- 14) グラフノーテーションに基づき、身体を上肢、体幹、下肢に3分類し、静的なポーズではなく、動的に連続したひと続きの動作がおこなわれる部位を使用部位とした。
- 15) 動作開始下肢とは、フレーズの始まりが下肢動作から始まるフレーズの場合に、開始が右下肢か左下肢かを示したものである。△が右側、▲が左側を示す。
- 16) Tは体幹, L. A. は左腕, R. A. は右腕, L. R. は左脚, R. R. は右脚, L. F. は左足, R. F. は右足の動作を示す欄で、下から上へ読み進める。記号説明は表3参照。
- 17) 1viral = 3cm。ケーララ州で大工が用いる単位で、日本の尺貫法のようなものである。

引用・参考文献

- 粟屋利江, 1992「ナーヤル」辛島昇ほか監修『南インドを知る事典』, 平凡社, 東京, p.515。
- Balakrishnan, P., 2003 *Kalarippayattu (The Ancient Martial Art of Kerala)*, Poorna Publications, Calicut.
- Census of India 2001 series-33 Kerala Provisional Population Totals paper-1 of 2001.*
- 遠藤保子, 1993「スポーツ環境としての民族」『スポーツ文化論シリーズ③スポーツを取り巻く環境』, 創文企画, 東京, pp.101-127。
- 2001『舞踊と社会—アフリカの舞踊を事例として—』, 文理閣, 京都。
- 2002『グラフノーテーションによる舞踊研究—ナイジェリアの舞踊を中心として—』, 立命館大学博士学位論文。
- Gangadharan, T. K., 出版年不明 “Kalari, Ankam, Poithu Etc.” *Evolution of Kerala History & Culture*, Calicut University, Calicut, pp.191-192.
- 1998 “Temple Sanketams, Changatams and Kalari” *Kerala History*, Calicut University, Calicut, p.182.
- 本田郁子, 1991「民族舞踊・民俗芸能の教材化の可能性を探る」『女子体育 第33巻第8号』, 社団法人日本女子体育連盟, pp.68-71。
- 1992「エスニック・パフォーマンスの動きか

- ら」松田岩男監『ダンスの教育学5 クラブ活動と上演法』, 徳間書店, 東京, pp.83-86。
- 稲垣正浩, 1993「後近代社会のスポーツ」寒川恒夫編『図説スポーツ史』, 朝倉書店, 東京, pp.156-188。
- 1997「後近代のスポーツ」稲垣正浩, 谷釜了正編『スポーツ史講義』, 大修館書店, 東京, pp.81-92。
- 2001『スポーツ文化の脱構築』, 叢文社, 東京。
- 2004『身体論—スポーツ学的アプローチ—』, 叢文社, 東京。
- 石井達朗, 1995『アジア, 旅と身体のコスモス』, 青弓社, 東京。
- 1999『寺子屋ブックス02 アクロバットとダンス』, 青弓社, 東京。
- Jacob, K. ed. 1972 *Folk Tales of Kerala*, Sterling Publishers (p) LTD, New Delhi, pp.75-88.
- ユリウス・ボフス著 稲垣正浩訳, 1988『入門スポーツ史』, 大修館書店, 東京。
- カムレーシュ・ダット・トリパーティー, 1991「古代インド文化におけるスポーツ・ゲーム・娯楽」松浪健四郎・河野亮仙編『古代インド・ベルシアのスポーツ文化』, ベースボール・マガジン社, 東京, pp.107-112。
- 辛島昇, 1992「タミル民族」辛島昇ほか監修『南インドを知る事典』, 平凡社, 東京, pp.432-433。
- Kealiinohomoku, Joann W. 1976 “A Comparative Study of Dance as a Constellation of Motor Behaviors Among African and United States Negroes” *CORD Dance Research Annual VII*, pp.1-179.
- 小稲義男編集代表, 1995『研究社新英和大辞典 第5版』, 研究社, 東京。
- 小西友七, 南出康世編集主幹, 2001『ジーニアス英和大辞典』, 大修館書店, 東京。
- 河野亮仙, 1988『カタカワ万華鏡』, 平河出版社, 東京。
- 1990「舞踊と武術—アジアの身体文化」藤井知昭監『民俗音楽叢書9身ぶりと音楽』, 東京書籍, 東京, pp.125-152。
- 1991a「インド拳法の道」松浪健四郎・河野亮仙編『古代インド・ベルシアのスポーツ文化』,

- ベースボール・マガジン社, 東京, pp.159-163.
- 1991b 「カラリの伝承 西南インド・ケーララ州の道場における儀礼とスポーツ」松浪健四郎・河野亮仙編『古代インド・ペルシアのスポーツ文化』, ベースボール・マガジン社, 東京, pp.150-153.
- 1992 「インドのホリスティックな武術—カラリパヤットのトレーニング—」『体育の科学』42巻10号, 杏林書院・体育の科学社, 東京, pp.763-766.
- 1994 「インドのホリスティックな武術—カラリパヤットのトレーニング—」寒川恒夫編『スポーツ文化論』, 杏林書院, 東京, pp.194-199.
- 1999 「舞踊・武術・宗教儀礼 芸能と祭りの身体論へ」野村雅一・市川雅編『叢書 身体と文化 (全三巻) 第一巻技術としての身体』, 大修館書店, 東京, pp.202-227.
- 松浪健四郎, 1989 「第二節 古武道・カラリパヤット」『古代宗教とスポーツ文化』, ベースボール・マガジン社, 東京, pp.207-215.
- Menon, A. Sreedhara, 1996a “Martial Arts” *Cultural Heritage of Kerala*, S. Viswanathan Pvt., Ltd., Madras, pp.127-128.
- 1996b “Kalaripayattu” *Cultural Heritage of Kerala*, S. Viswanathan Pvt., Ltd., Madras, pp.128-130.
- 1999 “Socio-Political Background” *Kerala History and its Makers*, S. Viswanathan Pvt., Ltd., Madras, pp.90-91.
- 2003 “Martial Arts” *A Survey of Kerala History*, S. Viswanathan Pvt., Ltd., Chennai, pp.456-457.
- 宮尾慈良, 1987 『アジア舞踊の人類学ダンス・フィールド・ノート』, PARCO 出版局, 東京。
- 日本体育協会監, 1987 『最新スポーツ大事典』, 大修館書店, 東京。
- 新美貴士, 2000 『南インドの伝統武術カラリパヤット: スポーツ人類学の視点から』, 大阪外国語大学大学院言語社会研究科1999年度修士論文。
- 2001 「伝統武術と近代スポーツ的な武道カラリパヤットを通じて」『Ex Oriente』Vol.5, 大阪外国語大学言語社会学会, pp.241-254.
- 野々宮徹, 2000a 「IV ニューススポーツとは何か1。ニューススポーツをめぐる論議」『ニューススポーツ用語事典』, 遊戯社, 東京, pp.236-244.
- 2000b 「2. 適合原理のオルターナティブ」『ニューススポーツ用語事典』, 遊戯社, 東京, pp.244-251.
- 岡田明憲, 1986 「インドのバラモン武術=ヴァジラムスティ」『武道学研究』19巻2号, pp.89-90.
- 岡田明憲・鈴木義孝, 1984 「インド拳法(Kalariparchi)の背景—文化史的観点から—」『武道学研究』16巻1号, pp.104-105.
- ピーター・ベイン 柏岡富英・柏岡祐子訳, 1992 『イメージの博物誌⑨ マーシャル・アーツ武術の霊的次元』, 平凡社, 東京。
- 重松伸司, 1992 「ドラヴィダ民族」辛島昇ほか監修『南インドを知る事典』, 平凡社, 東京, pp.501-502
- Raghavan, M. D., 1947 “The Kalari” *Folk Plays and Dances of Kerala*, Mangalodayan Press, Trichur, pp.43-46.
- スマッツ, J. C. 石川光男・片岡洋二・高橋史朗訳, 2005 『ホーリズムと進化』, 玉川大学出版部, 東京。
- 寒川恒夫編著, 1999 (1994) 『スポーツ文化論』, 杏林書院, 東京。
- 寒川恒夫編, 2004 『教養としてのスポーツ人類学』, 大修館書店, 東京。
- 鈴木義孝・岡田明憲, 1984 「インド武術界の現状—少林寺拳法。インド武術調査団の報告—」『武道学研究』16巻1号, pp.106-107.
- 高橋京子, 2006 「南インドのマーシャルアーツ「カラリパヤット」体験記」, 友添秀則編『現代スポーツ評論14』, 創文企画, 東京, pp.152-157.
- 多木浩二, 1995 『スポーツを考える—身体・資本・ナショナリズム』, 筑摩書房, 東京。
- 田辺明生, 1997 「伝統の政治学—インド・オリッサ州での武術競技会による国民文化の創造の試みとその波紋—」青木保ほか編『岩波講座文化人類学第9巻 儀礼とパフォーマンス』, 岩波書店, 東京, pp.175-207.
- 山下高行, 1999 「スポーツのさまざまな国境の越え方」『スポーツ文化論シリーズ⑩境界を越える

- スポーツ』, 創文企画, 東京, pp.67-102。
- 山崎利男, 1992「アーリヤ人」辛島昇ほか監修『南インドを知る事典』, 平凡社, 東京, pp.32-33。
- Zarrilli, Phillip B., 1979 “Kalarippayatt, Martial Art of Kerala” *The Drama Review* 23 (2), pp.113-124.
- 1984a “Doing the Exercise”: The In-body Transmission of Performance Knowledge in a Traditional Martial Art’ *Asian Theatre Journal* 1 (2), pp.191-206.
- 1984b “The Creation of the Kathakali Actor, PartII: The Actual Process” *The Kathakali Complex*, Shakti Malik, New Delhi, pp.95-143.
- 2002 “The Metaphysical Studio” *The Drama Review* 46 (2), pp.157-170.
- 2003 *When the body becomes all eyes*, Oxford University Press, New Delhi.

参照ホームページ

NPO 法人日本ホリスティック医学協会

<http://www.holistic-medicine.or.jp/index.htm>

Aspects of Kalarippayattu:
Experimental Study of Martial Arts in the Southern Indian State of Kerala

TAKAHASHI Kyoko *

Abstract: *Kalarippayattu*, a traditional martial art practiced in the southern Indian state of Kerala, is said to be a holistic discipline. However, there is no solid foundation for this claim. The objective of this paper is to examine the reasons why *Kalarippayattu* is regarded as a holistic martial art, from various angles – such as physical training, medical regime, and expression of faith – mainly by means of field work, my physical training experience and glyph notation of motion analysis.

Through the study, three observations were obtained. Firstly, *Kalarippayattu* is a physical training aimed at efficiency in (1) exercising of every part of the body, (2) self-defense, and (3) offense with arms, legs, and feet. Secondly, this martial art is also a system of medicine based on the principles of Ayurveda to (1) build up a healthy body as a result of physical training and the massage *uzhichil*, (2) provide treatment, and (3) holistically treat people from a religious perspective. Thirdly, a factor behind the development of this martial art is Kerala society's unique faith that goes beyond the borders of religion, caste, and gender while reflecting rigid customs in the society.

Given these observations, it can be said that *Kalarippayattu* is a holistic martial art that focuses on the balance of mind and body, which is the key to living a life deserving of human dignity, by satisfying and embracing the three elements of physical training, medicine, and faith.

Keywords: *Kalarippayattu*, marital art, physical training, glyph notation, medicine, faith, holism

* Ph.D. Candidate, Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University